

## 池田さんと大平さん

田 中 外 次

昭和二十五年の秋深いころであつたらうか。東京商大の同級生松本正雄君からの電話で、「大蔵大臣秘書官の大平正芳君の後援会を作るから、君も築地の栄家旅館にきてくれ」とのこと。私はその晩初めて栄家の敷居をまたいだ。大平さんにも女将の和田栄子さんにも初めて面識を得た。池田蔵相には陳情のため大蔵省でお目にかかつていたが、その晩くつろいでご挨拶した。その日から池田さんとは十五年、女将とは二十五年、大平さんとは三十年、皆さんがご他界されるまで長い深いご交際をいただくこととなつたのである。

池田さんを囲む会が二つ、大平さんを囲む会が二つ、その他関連の諸会合が毎月、休会なく栄家で行われ、私はそのいずれにも出席した。この交遊こそ私の後半生の大切な部分を織りなすこととなつた。

これらの会合では政治の話題はほとんど出なかつた。女将のはからいで、時には落語の柳橋や先代円歌が招かれるなど、もっぱら池田さん、大平さんのストレス解消に役立つた。いわば、ご両所の気心のおけない憩いの場として機能し、その交情は家族ぐるみのもに狭く深く深く進展した。

女将の栄子さんは、池田さんと同郷の広島出身で、頭は無類に切れ気も強く情に厚かつた。ご両所にもズケズケ直言することもあつたが、ご本人やご家族にはもちろん、政財界の客筋の深い信頼を得ていた。池田さんの会には当然大平さんが同席され、大平さんの会には何のこだわりもなく池田さんが上座につかれるといった具合であつた。

「このようなわけで、私の場合、大平さんへの回想は、池田さんや女将と切りはなすことができない。

池田さんの生前のこと、女将はたびたび大平さんに向って「アナタはもつと池田さんをほめないと駄目よ」といつていたが、いつも大平さんは無言であった。池田さんの七回忌の頃であつたらうか、大平会の席上でわれわれはこもこ池田さんの遺徳を偲んでいたが、大平さんは相変わらず聞き手に回っていられるので「大平さん何か感想を」と誰かがいうと、やおら重い口から「私はいわば池田のはらわたのなかで生活していたようなものですから、他人のことをいうようにはお話しすることはできないのです、「こ勘弁下さい」といわれた。

大平さんとはときどき池田さんに向って「総理、アナタは自分で鉛筆をなめなめ数字の計算をして下の者に渡すようなことはもうお止めになって下さい」といわれたらしい。池田さんは「いらんことをいうな」ときめつけられるのが常であつたという。この話は大平さんが楽しそうに何回か語られた。後年、大平さんが総理の座につかれ、国会の答弁で「司々に立案を命じております」と述べられるのが常であつたのと対照的である。

「こ両所とも実生活は質素であつた。栄家での会食で女中さんが漬物に醤油をかけると「もつたいないことをするな」と本気になって怒る池田さんであつた。大平さんは自宅の不要の電燈は黙って自分の手で消して歩かれた。大平会のある夕べ、私たちは大平さんに「日本はこれからインフレと賃上げでどうなっていくますかなあ」というと、「根本は国民に質素な生活をつづけてもらつてほしい。まずわれわれの実践でしょうが」と珍しく熱い眼ざしを向け、座をたれた。

池田さんはひところ「前尾君の頭にわしの身体をつけることができなあ」と嘆くほど頑健を信じていられた。大平さんは「わたしは頭は弱いが身体は丈夫ですからこ安心下さい」と笑わせていられた。

そのこ両所とかくも早い永別のときがこようとは。ただ合掌あるのみ。

(住友金屬鉱山相談役)